

# 「とる」の基本的意味 —類義語「つかむ」「にぎる」と比較して—

ミースワン モンシチャー

キーワード とる つかむ にぎる 類義語 保持動詞

## 1. はじめに

本稿は、「とる」の基本的意味を類義語「つかむ」「にぎる」と比較することにより、意味的差異の明確化と意味記述の精緻化を目指すものである。他動詞「とる」は非常に多くの意味を持つ語であり、その多義性は、現在の国語辞典の多数に分類された意味の記述を見ても明らかである。そこで、本稿では、「とる」の意味記述の精緻化を目的とし、考察対象を「とる」の複数の意味の中から特に基本的であると思われる意味に限定し、その意味分析を行う。ここで基本的意味とするのは「書棚の本をとる」「子供の手をとる」などの「とる」のように〈保持する〉という意味を表すものである。「とる」の基本的意味を様々な角度から分析することにより、「とる」の基本的意味の特徴をより詳細に記述することが可能となるはずである。

よって、本稿では、まず、「とる」「つかむ」「にぎる」の意味を記述している先行研究を取り上げ、検討する。次に、実例と作例を分析対象とし、「とる」の基本的意味に対応する類義語との比較を行う。最後に、類義語との比較を踏まえ、意味的な類似点・相違点を明らかにし、「とる」の基本的意味をより精緻に記述する。

## 2. 先行研究及びその問題点

### 2. 1. 類義語辞典における意味記述

本節では、類義語辞典における「とる」「つかむ」「にぎる」の意味記述を取り上げ、その記述内容を検討する。

柴田・山田(2002:804)の『講談社類語大辞典』

取る：自分のほうに引き寄せて持つ。「店先で品物を手に取ってじっくり見る」「母の手を取って走る」「剣を取って戦う」「手紙を書こうとペンを一」「棚の上の本を一」

掴む：手でしっかりと対象（の一部）を持って離さないようにする。「逃げる男の腕を一」「まわしをしっかりと一」

握る：5本の指を内側に曲げ、内部に対象物をおさめて離さないようにする。「ひもの端を一」「子供は迷子にならないよう、母親の手をしっかりと握って離さない」（下線は引用者）

中村・芳賀・森田編(2005:503-504)の『三省堂類語辞典』

取る：必要があつて何かを手に持つ。「銃／本を一」

掴む：しっかりと手のひらに収める。「腕／剣を一」

握る：物を手のひらの中にしっかりと持って、離さないようにする。「つり革／腕を一」（下線は引用者）

これらの記述を見る限りでは、「とる」「つかむ」「にぎる」の意味記述は類似しており、それぞれの特徴を適切に説明できるとは言えない。まず、『講談社類語大辞典』においては、「とる」の意味の説明には「もつ」が用いられ、「つかむ」にも「もつ」が用いられていることから、意味記述に大きな違いはないと考えられる。また、「つかむ」「にぎる」の意味記述には、いずれも「離さないようにする」が使われている。次に、『三省堂類語辞典』においても、「とる」の意味の説明には「もつ」が、「つかむ」には「おさめる」が、「にぎる」には「もつ」が用いられていることから、各語の意味に類似性があることが確認できるが、それらの意味の違いについては明らかにされているとは言い難い。さらに、「つかむ」と「にぎる」には「しっかりと」という記述がされており、意味の差が問題になりそうな語が無定義のまま含まれており、記述が分かりにくいと考えられる。これらの意味記述の問題点をまとめると、「とる」「つかむ」「にぎる」の意味の違いは以下の3点においてまだ不明瞭である。

まず、何を保持するかという点である。『講談社類語大辞典』によると、「とる」の保持対象は示されていないので、意味記述をさらに充実させる必要がある。また、「対象（の一部）」の「つかむ」、「対象物」の「にぎる」の記述を見ると、あらゆるものが対象になると解釈可能であるが、実際にはどのようなものが対象となるか、その対象に制約はあるか、まだ明確になっていないと思われる。さらに、『三省堂類語辞典』における「とる」には「何か」が、「にぎる」

には「物」が用いられており、「つかむ」には何も記述されていないことから、意味記述の不十分な点が見られる。そこで、より詳細な意味記述を行う必要がある。以下の例では、「とる」「つかむ」「にぎる」が互いに置き換えられないことを見ていただきたい。

- (1) アリゾナ州の地元当局の話では14日午後、フェニックス空港内で身体検査を拒否し、その際に女性検査官の左胸をつかんだ {×とった} として、「性的虐待」の疑いで逮捕された。 (朝日新聞 2011年7月20日)
- (2) 入部当時、門田君のバットの構えが何かおかしい。右打者なのに右手が下、左手が上——グリップを握る {×とる} 手が反対だった。 (朝日新聞 2011年7月7日)
- (3) セスは部屋に寄ってパソコンを取る {×つかむ/×にぎる} と、四階からエレベーターに乗って搭乗ロビーへむかった。 (BCCWJ)

(1)と(2)の場合には、「つかむ」「にぎる」をそれぞれ「とる」に言い換えると不自然な文になる。一方、(3)の場合には、「とる」を「つかむ」「にぎる」に置き換えができない。「とる」が(1)の「左胸」と(2)の「グリップ」と用いられないことと、「つかむ」「にぎる」が(3)の「パソコン」と用いられないことから、「とる」「つかむ」「にぎる」と共起する対象(ヲ格名詞)の制約があり、各語の保持対象が相違することが分かる。この点から、保持対象を特定する必要があり、より詳細な分析の余地が残されていると言える。

次に、何を用いて保持するかについて考える。『講談社類語大辞典』においては、「手でしっかりと対象(の一部)を持つ」の「つかむ」、「5本の指を内側に曲げ、内部に対象物をおさめる」の「にぎる」には保持手段が示されているが、「とる」の保持手段は記されておらず、明確であるとは言いがたい。また、『三省堂類語辞典』においても、「手に持つ」の「とる」、「手のひらに収める」の「つかむ」、「手のひらの中にしっかりと持つ」の「にぎる」は「手を使って対象を保持する」と解釈できる。しかし、「とる」「つかむ」には、以下のような反例が存在する。

- (4) 落合監督はバットを手に外野付近で全員にノック。「グラブではなく手で取るつもりで」とアドバイスすると、目の前で聞いた北名古屋市の佐藤功哉君(師勝南小5年)は「すごく分かりやすかった。やる気がわいてきました」。 (中日新聞 2007年1月17日)
- (5) 現状を見極めたうえでロジックを組み立て、そこから湧き出る柔軟な発

想で、写真のように天井に吊るしてあるバナナを棒を使って取ることを思いつきました。  
([http://www.mindscope.co.jp/recruit\\_sp/](http://www.mindscope.co.jp/recruit_sp/))

- (6) アジアゾウ「みどり」が鼻でつかんだ豆を、職員扮する鬼に向け勢よく吹き出した。  
(朝日新聞 2011年1月30日)

(4)の「手でとる」は記述通りに手が用いられているが、(5)の「バナナを棒を使ってとる」は棒が、(6)の「鼻でつかんだ」は動物の身体部分である鼻が用いられている。つまり、必ずしも手を使って対象を保持するわけではない。そのように考えると、保持手段に関する意味記述が正確ではないと考えられる。

最後に、どのように保持するのかという点である。『講談社類語大辞典』によると、「とる」は「自分のほうに引き寄せる」という記述がされていることから、〈自分の領域に移動させる〉ということを表すと解釈できる。

- (7) 料理はすべて大皿で出される。客は自由に選ぶ方式だ。大分県・由布院の工房で作られたという木の円盆を手に取って {×つかんで/×にぎって}、主婦たちの群れに加わった。まず、この日お薦めのピーマンとじゃこ炒めを盆に取る {×つかむ/×にぎる}。

(読売新聞 2011年10月25日)

上記の「手にとる」と「盆にとる」の例においては、「とる」を「つかむ」「にぎる」に置き換えると不自然になることから、「つかむ」「にぎる」の保持動作は「とる」と同様のものではなく、移動対象の着点を表す「ニ格」と共起しにくく、〈自分の領域に移動させる〉ことを表さないと考えられる。そこで、それぞれの語が有する保持動作に関してさらに考察を加える必要がある。

## 2. 2. 柴田・国広・長嶋・山田 (1976)

柴田・国広・長嶋・山田(1976:156-164)においては、動作動詞の意味を構成する意味要素が七種類の枠組みに分けられている。七種類の枠組みには、何が(動作主体)、いつ(時間)、どこで・どこから・どこに(場所)、何を(対象物)、何のために(目的)、何を(道具)、どうする(動作)があり、一つ一つについて「つかむ」と「にぎる」が比較されているが、時間と場所は無関係であるとしている。「道具」という枠組みにおいては、ニギルは「手の五指と掌」であり、ツカムは「手の指のみ」とであると説明されているが、前節で確認したように、「つかむ」は必ずしも「手の指」に限らず、動物の身体部分である「鼻」も用いられる。対象を保持する方法(道具を含む)については、考察の余地が

残っている。本稿では、この点についてさらに検討する。

次に、「目的」という枠組みにおいては、動作そのものの実現以外には特に目的のない動詞も多いが、ニギルとツカムでは背後にさらに目的がひそんでいるのが感じられることが説明されている。ツカムの転用法で対象物となるものには、機会・きっかけ・正しい結果・確証・本質・正体・実情・事情・情報などがあり、これらの語に共通の性質として〈普通はなかなか入手しにくい、追求の対象〉が考えられている。つまり、ツカムは〈獲得〉を目的としているということであるとしている。一方、ニギルの転用法には、「しゅうとが財布をニギッている」などがあり、ニギルの目的は〈確保〉であるとしている。転用法の「目的」に関する分析は、保持する動作につながり、重要な参考になるので、保持動作について分析する際、必要に応じて取り上げる。

また、「時間」と「場所」という枠組みに関しては、無関係であるとされるが、前節で確認したように、「とる」は移動対象の着点を表す「ニ格」と共起しやすく、〈自分の領域に移動させる〉ということを表す。「つかむ」「にぎる」と比較する際、どれぐらい保持するか、どこからどこへ移動させて保持するか、「時間」と「場所」が関係していると思われる。そこで、本稿では、この点についてもさらに考察を試みる。

### 2. 3. 先行研究の問題点

前節では、主な先行研究を概観し、それぞれの問題点を指摘した。これらの先行研究全てにおいて明らかにされていない、もしくは詳細に検討されていない点としては、以下の三点にまとめられる。

- ① 「とる」「つかむ」「にぎる」の保持動作に関する記述が不明瞭である。
- ② 「とる」「つかむ」「にぎる」の保持手段に関する記述が不正確である。
- ③ 「とる」「つかむ」「にぎる」の保持対象に関する記述が不明瞭である。

よって、実例と作例を分析することにより、これら三つの語の意味的な類似点・相違点について明らかにする必要がある。

## 3. 類義語分析

以下では、「とる」の基本的意味と類義語「つかむ」「にぎる」の意味的な類似点・相違点を明らかにする。保持動作、保持手段、保持対象の順にそれぞれの違いに注目し、

分析を進めていく。

### 3. 1. 保持動作

まず、一つ目の問題点である「どのように保持するのか」といった観点から、意味的な類似点・相違点に迫ってみたい。以下の例では、「とる」を「つかむ」「にぎる」に置き換えると不自然になる。

- (8) 私は柵から本をとった {×つかんだ/×にぎった}。 (作例)  
 (9) 短距離走、遠投、腰につけたリボンを相手から取る {×つかむ/×にぎる} 捕捉ゲームなどで運動能力を試した。(朝日新聞 2010年9月10日)

(8)と(9)<sup>1</sup>の場合には、「とる」を「つかむ」「にぎる」に言い換えると不自然な文になる。「柵から」と「相手から」は、物理的移動の起点として場所と人を表しており、到着点が想定されている。さらに、上記の(7)で確認したように、「木の円盆を手にとる」と「ピーマンとじゃこ炒めを盆にとる」の「とる」は「ニ格」と共起し、移動対象の到着点を表している。このことから、「とる」の保持動作は保持する対象を物理的に移動させるのが特徴であると言える。なお、「上・下・横からつかむ/にぎる」という例は、「カラ格」が示すのは対象の物理的移動の起点ではなく、保持の方向を表すのみである。

次に、「つかむ」の保持動作について考察する。

- (10) 手渡された荷物をつかんでとる/つかみとる。 (作例)  
 (11) 手渡された荷物を×とってつかむ/×とりつかむ。 (作例)

(10)のテ形「つかんで」は「とる」動作がどのような手段で実現するかを示し、この意味での連用修飾の機能を持つと考えられる。また、複合動詞「つかみとる」は前項要素「つかむ」が後項要素「とる」の手段を表し、テ形への言い換えが可能である。ここから、「つかむ」の保持動作は保持の手段に特徴があると考えられる。一方、(11)の「とってつかむ」と複合動詞「とりつかむ」に置き換えると、非文になる。つまり、「とる」は保持手段として「つかむ」動作を実現させることを表せない。なお、(11)の「とってつかむ」は「荷物をとってからつかむ」という解釈が可能であるが、この場合の「とる」は「つかむ」の保持手段を表さず、「とる」行動(いわゆる対象の移動)が完了した後に「つかむ」行動に移ることを表しているので、自然な表現になる。

最後に、「にぎる」の保持動作について見る。次の例を見ていただきたい。

- (12) 板前がまな板の上の包丁をにぎってとる／にぎりとる。 (作例)
- (13) a. 雪を×とりにぎると固まるので、雪だるまができる。 (作例)  
 b. 雪をとってにぎると固まるので、雪だるまができる。 (作例)
- (14) これで両手をぬらし左手にネタ、右手に酢飯（1貫18g位）を取って握ります。ネタの上に酢飯を置き、指先で酢飯にくぼみをつけます。

(<http://dt125kazuo.blog22.fc2.com/blog-entry-831.html>)

(12)のテ形「にぎって」は「とる」動作がどのような手段で実現するかを示している。また、複合動詞「にぎりとる」は前項要素「にぎる」が後項要素「とる」の保持手段を表し、テ形への言い換えが可能である。ここから、「にぎる」の保持動作は「つかむ」と同様、保持の手段に特徴があると考えられる。一方、(13a)の「雪をとりにぎる」という例は非文である。つまり、「とる」は保持手段として「にぎる」動作を実現させることを表せない。

一方、(13b)<sup>2)</sup>の「雪をとってにぎる」の「にぎる」は「保持する」ことでなく、雪をしっかりと固めるように押し曲げて形を作ることを表しているので、自然な表現になる。また、(14)の「酢飯をとってにぎる」が言えるのは、「保持している酢飯を形作る」と解釈された場合であり、「とって」が「にぎる」の保持手段を表しているわけではない。

ここで、保持の手段に特徴がある「つかむ」と「にぎる」の相違点を確認したい。まず、「つかむ」の例文を見ていただきたい。

- (15) 津波が襲い、近くの女性が濁流で流されてくるのを見た善太さん（23）は、とっさに腕をつかんで {×にぎって} 建物の中に引き上げていた。 (読売新聞 2011年4月20日)
- (16) 訴状によると、男性は2010年6月、研修会議の宿泊先で女性職員に抱きついたなどとされたが、「女性の手をつかんで{×にぎって}引っ張ったのは一瞬だった」と主張。 (読売新聞 2012年2月17日)

(15)は近くの女性が流されていかなないようにとっさに腕を保持したこと、(16)は女性が動かないように一瞬に手を保持したことを表している。ここから、「つかむ」は「動かないように不安定な状態を止める」ことを表すと考えられる。(15)の「とっさににぎって引き上げる」と(16)の「にぎって引っ張る」に置き換えると、不自然になる。「にぎる」が用いられないのは、極めてわずかな時間で不安定な状態を止めることを表さないためであると思われる。

続いて、「にぎる」の例文を見てみよう。

- (17) 診察のときは必ず子どもの手を握る {×つかむ}。赤ちゃんがぎゅっと握りかえして {×つかみかえして} くれることがある。「お互い安心するのかな。こちらがパワーをもらう」 (朝日新聞 2012年3月18日)
- (18) 撮影時はピストル式に握って {×つかんで} 使う。片手でOKだが、ボディーマが長方形なので、手の小さい人は両手でしっかり握った {×つかんだ} 方がいいだろう。 (読売新聞 2008年6月12日)

(17)の「手をにぎる」は親が安心させるために必ず子どもの手を保持すること、(18)の「カメラをにぎる」は手の小さい人が落とさないようにカメラをしっかり保持したことを表している。つまり、「にぎる」は「対象を大事にするために力を入れてしっかり保持する」ことを表すと考えられる。この場合においては、「つかむ」に置き換えると不自然になる。「つかむ」が用いられないのは、対象を大事にすることと力を入れることを表さないためであると考えられる。

以上の考察をもとに、「とる」「つかむ」「にぎる」の保持動作を表1にまとめておく。

表1 「とる」「つかむ」「にぎる」の保持動作

	保持動作
とる	対象の物理的移動 (起点と到着点が想定される)
つかむ	保持の手段、移動なし (動かないように対象の不安定な状態を止める)
にぎる	保持の手段、移動なし (力を入れてしっかり保持する)

### 3. 2. 保持手段

本節では、二つ目の問題点として「とる」「つかむ」「にぎる」が「何を用いて対象を保持するのか」といった観点から、意味的な類似点・相違点を明らかにする。以下の例では、「とる」を「つかむ」「にぎる」に置き換えることができることを確認する。

- (19) 参加した男女16人のほとんどが60歳以上。太白区職員が指導役となり、椅子に座ったまま足を上げたり、お手玉を右手で投げて左手で

取ったり {つかんだり／にぎったり} と、1時間程度、軽く体を動かす。  
(読売新聞 2011年12月15日)

- (20) 観客のなかから一人登場してもらい、輪のどれか一つを指で突き刺してもらいます。そして、チェーンや紐の罠(トラップ)にかかり、それを指で取る {つかむ／にぎる} 方が良いか、それともチェーンや紐に巻かれずに指を脱出させる方(エルード)が良いか尋ねます。

(BCCWJ)

「とる」の保持手段は、(19)では「左手」、(20)では「指」というように、基本的に対象を一番移動させやすい身体部分であると考えられる。この場合においては、「つかむ」「にぎる」に置き換えることができる。「手」「指」以外の保持手段に関しては、以下の例文を見ていただきたい。

- (21) おとなしそうなタツノオトシゴ。だが、その仲間は尾でサンゴなどをつかむ {とる} 特技を持つという。  
(朝日新聞 2011年12月30日)

- (22) マーラは、子どもたちが名前を呼ぶ声に誘われるように飼育係員の背後から現れた。ミルクを飲んだり、鼻で青草をつかんだり {とったり} するしぐさをすると、子どもたちは大喜び。

(読売新聞 2011年11月24日)

(21)はタツノオトシゴが人間のように手・指を持っていないため、「尾」を使ってサンゴなどを保持すること、(22)は象(マーラ)も同様、手・指の代わりに「鼻」を使って青草を保持することを表している。ここから、「とる」と「つかむ」の保持手段に関しては、手・指を持っていない動物は、動かない・落とさないように手・指と同じ機能をする「尾」「鼻」といった身体部分を使って保持することが考えられる。ここで手・指と同じ機能をするというのは、曲げる・折り込む・丸めることができることである。

次に、「とる」を「つかむ」「にぎる」に置き換えられない例を見てみよう。

- (23) 『敵陣でサッカーをしよう』という具体化したキーワードを置き、そういう練習をし、ボールを取ったら {×つかんだら／×にぎったら}、速く敵陣に行く意識が選手に出ることが大事。

(中日新聞 2012年5月9日)

(23)の「ボールをとる」は、サッカー選手が足を用いてボールを保持するこ

とを表している。「つかむ」「にぎる」が用いられないのは、保持手段が「足」であるためであると思われる。ここから、「とる」の保持手段は「足」とも「手」とも「手・指と同じ機能をする身体部分」とも考えられ、基本的に対象を移動できる身体部分である。

続いて、「とる」と「つかむ」が相互に入れ替え可能な例と「とる」を「つかむ」に置き換えができない例を取り上げる。

- (24) 生肉をつかんだ {とった} 箸 (はし) に菌が移ることがある。野菜をつかんだり {とったり}、自分が食べたりするときに使う箸とは分ける。  
(朝日新聞 2012年1月4日)
- (25) グローブをしたまま調味料を取ったり、ヘラでかき混ぜたり、トングで食材をつかんだり {とったり} ができる。  
(読売新聞 2012年4月24日)
- (26) オランウータンは長い枝を使って、遠くにある餌をとる {×つかむ}。  
(作例)

「とる」と「つかむ」の保持手段は、身体部分に限らず、(24)の「箸」、(25)の「トング」などの片手で用いる、二本一対になった棒状の道具である。これらの道具は手・指と同じ機能をするものである。ここで手・指と同じ機能をするというのは、挟む・つまむ・押さえることができることである。つまり、このような機能があれば、「とる」と「つかむ」の保持する道具になる。それに対して、(26)の「枝」は手・指と同じ機能を持っておらず、動かない・落とさないように餌の不安定な状態を止めて保持できる道具ではないため、この場合「つかむ」に置き換えると不自然な表現になる。ここから、「とる」の保持手段は手・指と同じ機能をする道具（箸、トング）とも、手・指と同じ機能を持っていない道具（枝、棒）とも考えられるのに対して、「つかむ」の保持手段は手・指と同じ機能を持っており、動かない・落とさないように対象の不安定な状態を止めて保持できる道具のみであることが明らかである。

最後に、「にぎる」を「とる」に置き換えができない例を見てみよう。

- (27) 人さし指と中指をそろえてボールを持ち、手のひら深くでぎゅっと握る {×とる}。  
(朝日新聞 2010年7月11日)
- (28) その一人の臼井富美さん(68)は、「被害者はのどがカラカラに乾き、すがるように私の手を握り締めた {×とりしめた}」と振り返った。  
(読売新聞 2010年3月21日)

『大辞林 第三版』(2006:1915)においては、「にぎる」は「手の指を内側に曲げてその中に物を持つ」という意味を表すとしている。この意味記述から見ると、「にぎる」の保持手段は手と指であることが分かる。しかし、厳密に言えば、(27)の「にぎる」は保持の強さを表す「ぎゅっと」という副詞と問題なく共起しており、指と手のひらを用いてボールを手の内側に収めて強く力を入れて保持することを表しているため、「とる」に置き換えることができない。また、(28)の複合動詞「にぎりしめる」は、後項要素「しめる」が強く引っ張って緩みのないようにすることを表し、前項要素「にぎる」と組み合わせると「離さないように手の内側に収めて手に力を入れて強く保持する」という意味になる。この場合、「とる」は強く保持するという意味合いがないので、「とりしめる」に置き換えると不自然になる。ここから、対象を保持する強さに関しては、「とる」は強く保持するという意味合いがないが、「にぎる」は基本的に「指と手のひらを用いて手の内側に収めて力を入れてしっかり保持する」ことであると考えられる。

以上の考察をもとに、「とる」「つかむ」「にぎる」の保持手段を表2にまとめておく。

表2 「とる」「つかむ」「にぎる」の保持手段

	保持手段
とる	対象を移動できる身体部分・道具 (手、足、手・指と同じ機能をする動物の身体部分、道具)
つかむ	対象の不安定な状態を止められる身体部分・道具 (手、手・指と同じ機能をする動物の身体部分、 手・指と同じ機能をする道具)
にぎる	対象を手の内側に収められる身体部分 (指、手のひら)

### 3. 3. 保持対象

最後に、三つ目の問題点として「とる」「つかむ」「にぎる」が「何を保持するのか」といった観点から、意味的な類似点・相違点を明らかにする。以下の例では、「とる」を「つかむ」「にぎる」に置き換えることができることを確認する。

- (29) 同高は、ボールを取る {つかむ} アーム部分の動作が機敏になるようロボットを改良。 (毎日新聞 2012年3月24日)
- (30) 突然のことに驚きを隠せないジヨンは、その後、父親の手を取る {にぎる} と感動のあまり号泣したという。 (朝日新聞 2012年6月5日)

保持対象は、(29)では「ボール」と、基本的にはあらゆる形の〈物体〉であるが、(30)の「手」のように物体以外の人間の〈身体部分〉である場合もある。いずれも〈移動できる具体的対象〉であることが分かる。また、保持動作で確認したように、(29)はロボットが元あった場所からボールをロボットの方に移動させて保持すること、(30)は主体が父親の手を自分側に移動させて保持することを表している。つまり、「とる」の対象の特徴は、元あった場所から自分の領域へ移動させる具体的対象であると考えられる。

以下では、「つかむ」「にぎる」を「とる」に置き換えができない例を取り上げる。まず、「つかむ」の例文を見ていただきたい。

- (31) 発表によると、男性は1月18日午後11時頃、富山市内の飲食店で、部下の男性職員に対し、暴言を吐いたうえ、顔や頭髪をわしづかみにする、胸元をつかむ {×とる}、押し倒すなどの暴行を働き、右目に8日間のけがを負わせた。 (読売新聞 2012年2月16日)
- (32) 川崎市幸区の夢見ヶ崎動物公園で7月に生まれた小型のサル「コモマーモセット」のメスの赤ちゃん「オンプ」は、母親や姉の背中をつかんだ {×とった} まま、なかなか離さない。 (朝日新聞 2011年9月9日)

(31)の「胸元」は男性職員の身体の一部であり、(32)の「背中」は母親や姉の身体の一部であり、いずれも人間または動物の〈身体部分〉であるが、「とる」に置き換えると、不自然になる。保持する身体部分の形からみると、「とる」の対象は「腕」のように棒状の身体部分であるが、「つかむ」の対象は「腕」のように棒状の身体部分でも、「胸元」「背中」のように平らな表面の形をしている身体部分でもあり得ると考えられそうである。

しかし、二つの例の文脈からみると、(31)は部下の男性職員が逃げられないように胸元をつかんだこと、(32)は母親や姉が離れないように背中をつかんだことを表している。この場合「とる」に置き換えられないのは、上記の(30)で説明した通りに「とる」が移動させられる対象でなければならず、(31)と(32)において対象の移動が見られないためである。すなわち、「とる」と「つかむ」

の保持対象の違いは「腕」「胸元」「背中」などの身体部分の形に関係がないということである。また、保持動作で確認したように、「つかむ」は逃げられない・動かないように固定し、対象の不安定な状態を止めることである。(31)と(32)の保持対象は相手の身体の一部が動作主体から逃げられる、または離れるものである。ここから、「つかむ」の対象の特徴は、逃げられる・離れる不安定な具体的対象であると考えられる。

次に、「にぎる」を「とる」に置き換えができない例を見てみよう。

(33) 「柿原一、お前はホームランだろー」。スタンドからも声が飛ぶ。「最後は自分のスイングを」とグリップを強く握った {×とった}。

(朝日新聞 2011年7月23日)

(34) 住職は庭の端に立ち、金属の熊手の先を砂にあてた。柄を握る {×とる} 両手に力を込め、前かがみになって一歩ずつ、後ずりを始める。

(朝日新聞 2012年4月18日)

(33)のグリップはバットの一部であり、(34)の柄は熊手の一部である。つまり、「にぎる」の対象は、具体的対象の保持しやすい部分とも考えられる。また、二つの例の文脈からみると、(33)は五本の指と手のひらを用いて手の内側に収めて強く保持したこと、(34)は手の内側に収めて両手に力を込めて保持することを表している。保持動作で確認したように、「にぎる」は力を入れてしっかり保持することである。この場合「とる」に置き換えると不自然になる。なお、「熊手の柄を置き場からとる」という例は、対象である熊手の移動が見られるので、自然な表現になる。ここから、「にぎる」の対象の特徴は、五本の指と手のひらを用いて手の内側に収めて力を入れてしっかり保持する具体的対象であると考えられる。

以上の考察をもとに、「とる」「つかむ」「にぎる」の保持対象を表3にまとめておく。

表3 「とる」「つかむ」「にぎる」の保持対象

	保持対象
とる	元あった場所から自分の領域へ移動させることが可能な具体的対象
つかむ	動作主体から逃げられるまたは離れることが可能な具体的対象
にぎる	手の内側に収めて力を入れてしっかり保持することが可能な具体的対象

### 3. 4. 「とる」「つかむ」「にぎる」の意味的な類似点・相違点

以上の考察から、「とる」「つかむ」「にぎる」の意味的な類似点・相違点を表4にまとめておく。

表4 「とる」「つかむ」「にぎる」の意味的な類似点・相違点

	保持動作	保持手段	保持対象
とる	対象の物理的移動 (起点と到着点が 想定される)	対象を移動できる 身体部分・道具	元あった場所から 自分の領域へ 移動させることが 可能な具体的対象
つかむ	保持の手段、移動なし (動かないように 対象の不安定な 状態を止める)	対象の不安定な 状態を止められる 身体部分・道具	動作主体から 逃げられるまたは 離れることが 可能な具体的対象
にぎる	保持の手段、移動なし (力を入れて しっかり保持する)	対象を手の内側に 収められる身体部分	手の内側に収めて 力を入れてしっかり 保持することが 可能な具体的対象

以上をまとめると、「とる」「つかむ」「にぎる」の保持対象と保持手段は、保

持動作によって限定されると言える。「起点から到着点へ物理的に移動させる」具体的対象、「動作主体から逃げられるまたは離れる不安定な」具体的対象、「手の内側に収めて力を入れてしっかり保持する」具体的対象であれば、それぞれ「とる」「つかむ」「にぎる」の保持対象になる。また、「移動できる」「不安定な状態を止められる」「手の内側に収められる」というような機能があれば、それぞれ「とる」「つかむ」「にぎる」の保持手段になる。すなわち、保持対象と保持手段はそれらの特徴・機能があれば、どのような対象でもどのような手段でも良い。結局、保持対象と保持手段は本質的なことではなく、保持動作に集約されると考えられる。

#### 4. 「とる」の基本的意味

以上、類義語「つかむ」「にぎる」との比較の考察結果を踏まえた上で、「とる」と各語の意味の相違について詳しく検討した。以下、「とる」の基本的意味を記述する。

とる：〈人間（または動物）が〉〈対象を移動できる身体部分（または道具）で〉〈具体的対象を〉〈元あった場所から自分の領域へ〉〈物理的に移動させて〉〈保持する〉

#### 5. おわりに

以上、「とる」「つかむ」「にぎる」の意味的な類似点・相違点を明らかにし、「とる」の基本的意味をより精緻に記述した。今後は、「もつ」「つまむ」「はさむ」などの保持動詞についても広く考察し、各保持動詞の基本的意味を記述、分析していきたい。また、類義関係にある保持動詞に関しては、「とる」と「もつ」の類義語分析、「つかむ」と「にぎる」の類義語分析、「つまむ」と「はさむ」の類義語分析を進めていきたい。

#### 注

1 『大辞林 第三版』(2006:1849-1850)においては、「とる」は多義語として

扱われており、「手に持つ」という意味①と「手に取って自分のものとする」という意味②を別の意味としている。例(9)の「リボンをとる」はリボンを保持するという意味①の解釈と、リボンを自分のものとするという意味②の解釈が可能であるが、本稿では、「つかむ」「にぎる」と類義関係にある「保持する」という意味を表す「とる」を直接の考察対象とする。

- 2 『大辞林 第三版』(2006:1915)においては、「にぎる」は多義語として扱われており、「手の指を内側に曲げてその中に物を持つ」という意味②と「米の飯を手の中で固めて、握り鮎や握り飯などを作る」という意味⑤を表している。例(13b)の「雪をとってにぎる」は雪をしっかりと固めるように押し曲げて形を作ることを表しており、意味⑤の解釈がされるので、「とる」「つかむ」と類義関係になく、本稿では、直接の考察対象とはしない。

## 引用文献

- 柴田武・国広哲弥・長嶋善朗・山田進 (1976) 『ことばの意味1』 pp.156-164、平凡社 (平凡社選書)  
 柴田武・山田進 (2002) 『類語大辞典』 講談社  
 中村明・芳賀綏・森田良行 (2005) 『三省堂類語新辞典』 三省堂  
 松村明編 (2006) 『大辞林 第三版』 三省堂  
 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』 角川書店

## 例文出典

- インターネット上で公開されているホームページ  
 ([www.yahoo.co.jp](http://www.yahoo.co.jp)、[www.goo.ne.jp](http://www.goo.ne.jp))  
 新聞ホームページの記事検索  
 ([www.asahi.com](http://www.asahi.com)、[www.yomiuri.co.jp](http://www.yomiuri.co.jp)、[mainichi.jp](http://mainichi.jp)、[www.chunichi.co.jp](http://www.chunichi.co.jp))  
 『現代日本語書き言葉均衡コーパス (2012年度版)』  
 (Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese : BCCWJ)